【ポスター発表】

島嶼集落における支え合い活動への取り組みと課題

－鹿児島県の離島自治体における聞き取り調査をもとに－

○　鹿児島国際大学　大山　朝子（4942）

小窪　輝吉（鹿児島国際大学・2758）、岩崎　房子（鹿児島国際大学・4943）、田中　安平（鹿児島国際大学・6719）、山下　利恵子（鹿児島国際大学・5023）、田畑　洋一（鹿児島国際大学・1412）、髙山　忠雄（鹿児島国際大学大学院・441）

［キーワード］島嶼集落、地域支え合い活動、生活互助

１．研 究 目 的

琉球弧の島々は他の島嶼と同様に地理的・経済的状況から過疎高齢化が進行し、地域機能の低下を余儀なくされている。他方、これらの島嶼集落では、相互扶助(互助)の伝統等、地域独自の文化あるいはその精神が根強く残っていると言われている。本研究では、鹿児島県の離島にある小規模自治体における集落の現状と自治体全域で展開している地域支え合活動への取り組みの現状及び課題を調べる。そして、琉球弧型互助文化とされる「結の精神」「シマ文化」「祭祀」「祭り」「郷友会」などが地域支え合い活動においてどのような関わりを持つかを明らかにし、生活互助の再生を目指す地域づくりにおいて地域の伝統や文化が福祉資源として果たす役割を検討することを目的とする。

２．研究の視点および方法

本研究では、地域支え合い活動に取り組んでいる鹿児島県 A 自治体の集落の区長（男性 9 人、女性 2 人）および地域支え合い活動の代表者（男性 4 人、女性 7 人）に聞き取り調査を実施した。調査方法は個別の半構造化面接法であり、1 回につき約 1 時間の聞き取りを行った。区長への調査内容は、集落の規模、集落行事、集落の組織、高齢者の日常生活、生活互助、防災互助、郷友会との交流などであった。地域支え合い活動の代表者への調査内容は、活動への取り組みのきっかけと経過、活動内容、活動の課題、今後の計画などであった、調査時期は 2014 年 9 月～11 月であった。

３．倫理的配慮

面接にあたり､調査の趣旨を説明し調査協力の承諾をいただいた｡録音の許可を得る際、回答したくないことがあったら話さなくても構わないこと、個人が特定できないよう匿名扱いにすることなどを説明した。聞き取り調査終了後に、逐語録を作成して内容を面接協力者に確認してもらい、その結果を分析データとした。また、所属大学の教育研究倫理審査委員会の承認を得てから調査を実施した。

４．研 究 結 果

（１）集落区長への聞き取り調査の結果

①集落ごとに人口の多少があるものの高齢化率は総じて高く、人口が少ない集落ほど高

齢化率が高かった。②ほとんどの集落において豊年祭と敬老会が実施されていたが、存続への危機感から積極的に継承活動に取り組んでいる集落があった。③比較的人口の多い集落では、集落内の各種団体が組織化されていたが、比較的人口の少ない集落では組織のまとめ役の担い手不足により、各種団体が組織化されていない集落があった。④健康な高齢者は農作業や隣近所との交流など積極的な生活を送っていたが、引きこもり傾向のある高齢者もいた。また、日用品の購入は集落内の店を利用していたが店の無い集落もあった。医療に関しては村の診療所を利用していた。⑤日常的な互助慣行としては、すべての集落で隣家同士の声かけや助け合いがなされており、⑥災害に対する互助慣行としては、すべての集落で生活互助を基盤とし、消防団・青壮年団による避難誘導や戸締りなどが行われていた。⑦郷友会との交流は主に豊年祭を通して行われていたが、郷友会組織が休会している集落もあった。郷友会がない場合でも、個々人で集落の行事などに参加していた。

（２）地域支え合い活動代表への聞き取り調査の結果

①活動のきっかけはマップづくりが動機づけとなり、行政からの働きかけが後押しをしていた。②先発の団体では、世話役の中に支え合いの必要性が認識され、「自分たちも何かできるんじゃないか」という気持ちが生まれた。後発の活動団体は先行する団体の活動を見て「自分の集落でも何かしないと」という気持ちが起こった。③活動の代表者は民生委員や区長が多かった。④活動内容は集落ごとに特徴があり、サロン、健康教室、食事会、野菜販売、惣菜作り、グラウンドゴルフ、八月踊りの歌の継承など多岐にわたっていた。⑤活動の課題は、運営資金の確保、引きこもり傾向の高齢者の参加促進、集落全員の参加促進などであった。⑥今後の計画について、先発の団体では現在の活動を無理しないように持続することと活動を集落全体に浸透するよう活動の中身を濃くすることをあげた。後発の団体では､活動メニューを増やすことや資金確保のための活動を始めることをあげた。

そのほか、活動の効果として「高齢者に笑顔と元気が出てきた」「共通の話題ができた」「サロンにおしゃれをしてくるようになった」｢参加することが生活リハビリになり介護予防にもなっている」「高齢者の笑顔が生きがいになっている」などの意見があった。

5. 考 察

地域支え合い活動はマップづくりでの学びと行政の物心両面の支援で始まり、人々の「助け合い（ユイ)」の精神と「シマ（集落)」を大事にする心により支えられていた。活動内容は集落ごとに異なるが、支え合いへの認識が共有されつつあった。運営資金の確保と引きこもり傾向の高齢者や集落全員の参加促進が共通の課題となっていた。また、地域支え合い活動による集落文化の継承の一例として八月踊りの唄の継承活動もあった。本研究では島嶼集落における生活互助の再生への取り組みにおける地域の文化や精神が果たす役割をある程度確認することができた。今後は支え合い活動がもたらす生活互助及び住民意識の変容を検討する必要があろう。

謝辞）本研究は JSPS 科研費 26285142 の助成を受けた。